

1. 科目名 (単位数)	児童環境保健学特論 (2単位)	3. 科目番号	SJMP6324						
2. 授業担当教員	鈴木 路子								
4. 授業形態	講義	5. 開講学期	秋期						
6. 履修条件・他科目との関係	履修条件は特になし	履修形態 (通信教育)	R						
7. 講義概要	<p>現代の児童をとりまく、自然環境・生活環境について保健衛生的見地から講義する。また、児童の成長過程で、外界からの各種環境刺激を受けながら発達する生命を保持増進する能力 (環境適応能力) を基盤として、胎内環境との胎児の発育も含めて、心身の発達・健康影響について論及する。さらにその環境刺激の量と質の問題から、児童を取り巻く環境への接近を図る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域の気象因子と住まい—建築衛生的視点の導入— 2. 各種生活環境と児童の健康影響 3. 児童の生活習慣の確立と環境保健 4. 身近な環境から、生態系へ (心身ともに健康な国民の育成から、次世代へ繋がる環境保全、生態系へ) 児童教育学の基盤として、人間環境系は重要な課題であり、教育・福祉・医療の原点である。総合的思考能力の育成、身近な生活環境や生活行動のあり方を企画立案し、実践行動する能力の育成が究極の目標である。 								
8. 学習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 紀元前より、人の生命、疾病、健康状態は、空気・水・光・植生等、地域環境からの相互作用としてとらえる事が重要とされてきた。このヒポクラテスの考えが現代にも通用すること、「ヒポクラテスの時代へ帰れ」の科学的意義を実証データにより再現する：気象条件と病欠、発育の季節変動等 (時系列解析による) ほか。 2. 児童の発育・健康と各種環境要因との相互作用を明らかにする。 —大気汚染・水質汚濁・気象因子・騒音・電磁波・食品衛生環境・住環境・衣環境等の生体への影響— 3. 2で明らかになった現状に将来予測も含めて、どのような対策を行うかを検討すると共に、教育行政、衛生行政 (環境保全)、福祉等の側面から、法令・施策の現状と課題を認識する。 								
9. アサイメント (宿題) 及びレポート課題	<ol style="list-style-type: none"> 1. 古典となった著書等から学ぶ。 ルソーの「エミール」、ヒポクラテス「古い医学について」、ナイチンゲール「看護覚え書」、クロード・ベルナル「実験医学序説」、キャノン「人間この未知なるもの」、ほかの著書・文献より人間の生命現象 (成長過程) と環境との関連について学び、児童教育にどのように生かしたらよいか考察せよ。 2. 現代の児童の心やからだ、生活行動と環境との相互作用について。 3. 児童の健全育成と地域・学校・家庭との関連について考察せよ。 								
10. 教科書・参考書・教材	<p>【教科書】 鈴木路子編『人間環境・教育福祉論』光生館 2007</p> <p>【参考書】 厚生白書『国民衛生の動向』厚生統計協会、平成 25 年 「小児保健学会誌」「建築衛生学雑誌」「空気清浄衛生工学会誌」「照明学会誌」「WHO Technical Report」 【日本生気象学会誌】ほか</p>								
11. 成績評価の規準と評定の方法	<p>○成績評価の規準</p> <ol style="list-style-type: none"> ①児童期のとらえ方について、発達段階別に環境との相互作用について、認識を深めていること ②環境との相互作用としての「適応」(環境適応) について、正しく認識しているか ③人間の生命・生活生存と外的環境因子についての基本をとらえ、環境教育への展開ができること <p>○評定の方法 評価方法：論文、レポート、日常の授業態度 (質問、授業参加度) で行う。</p> <table style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>論文</td> <td>40%</td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>40%</td> </tr> <tr> <td>日常の授業時の応答・参加度等</td> <td>20%</td> </tr> </table> <p>※通信教育は第1レポート～第3レポート 100%</p>			論文	40%	レポート	40%	日常の授業時の応答・参加度等	20%
論文	40%								
レポート	40%								
日常の授業時の応答・参加度等	20%								
12. 受講生へのメッセージ	<p>児童の成長過程と環境との相互作用を主として保健衛生的視点で扱った研究領域は、非常に貴重です。環境諸要因と児童の発育 (成長) 過程に及ぼす影響や心身状態との因果関係については、極めて難しい問題をはらんでいます。この問題に視点をおいて、すでに明らかになっていること、影響が予測されることについて、十分な検討が必要です。そして、これからの児童の健全育成について、人間環境保健、人間環境福祉の立場から、十分に支えられるだけの認識と科学的知見の導入が必要不可欠と考えます。児童の教育実践の基盤として、より実践化されていくことを期待しています。</p>								
13. オフィスアワー	別途通知します。								
14. 学習の展開及び内容【テーマ、学習の目標、学習の内容、キーワード、学習の課題、学習する上でのポイント等】	<p>1. テーマ 人間の成長過程と環境刺激 (I) 五感の発達—脳神経系の発達と環境—</p> <p>【学習の目標】 脳神経系の発達は、胎内環境下でその基盤が形成され、個として出生し、外界からの環境刺激を受けて発達をしてゆく成長過程に視点を当てる。ここではとくに、皮膚感覚・視覚・聴覚など、感覚として受けた刺激が、脳神経系の発達を促す相乗効果となっていることを理解し、児童の健全育成にとっての環境保健のあり方を考える科学的基盤を学び、実践場面への応用力の育成を図る。</p> <p>【学習の内容】 日本赤ちゃん学会 (2001年設立) における研究成果 (学会誌「ベビーサイエンス」) より、五感の発達と脳神経系に関する文献から、人間の赤ちゃんの生命力の神秘性を現代科学の成果を導入するとともに、今日の脳神経系の研究成果の医学生物学的、哲学的基盤として、前東大脳研究所長 故時実利彦教授の研究成果を中心に保育実践場面での</p>								

	<p>研究成果の展開を試みる。とくに知識と体験、科学研究と実践場面への応用は、現代の児童学研究の基礎基本となる。</p> <p>【キーワード】 成長過程、五感、脳神経系、環境刺激</p> <p>【学習の課題】 自然環境からの空気の流れ、光、温冷感、音、景観など、の感覚刺激が、乳幼児期の成長過程にどのように作用し、脳神経系の発達を促すかについて、論述せよ。</p> <p>【参考文献】 ベビーサイエンス、2001～2007. VOL.1～7 諸隈誠一ほか3『胎児行動による中枢神経機能の評価』ベビーサイエンス Vol.2007 守田知代、板倉昭二、安藤規弘『自己認識と自己評価の発達とその神経基盤』ベビーサイエンス Vol.2007 加藤正晴『2時運動を中心とした運動視の発達』ベビーサイエンス Vol.2007 ほか 津本忠治著『脳と発達：環境と脳の可塑性』朝倉書店、1986 時実利彦『目で見る脳—その構造と機能』東京大学出版会、1969 時実利彦『よるめく現代人』岩波新書、1960 時実利彦『脳の話』岩波新書、1962 時実利彦『人間であること』岩波新書、1970</p> <p>【学習する上での留意点】 教科書から、各種文献にわたる広範囲の流れを主として生理生化学的側面から、発達の様相を把握する。</p>
2 . テ ー マ	人間の成長過程と環境刺激 (II) 生体リズムの獲得と光環境
	<p>【学習の目標】 人間の生命の営みは、呼吸・循環・消化・吸収・排泄・体温・代謝活動・運動など多くの内臓諸器官が活動し、脳神経系・免疫系・内分泌系が、調整する。これらの生理的・生化学的視点に立った生命現象は、外界の光環境（日射量・日照時間）温熱・空気・気象環境によって変動する。母胎に依存していた胎児期から、乳幼児期の成長過程において、これらの生命現象にリズムが形成される（生体リズム）。ここでは、小児期における生体リズムの獲得過程（同調）を明らかにする。</p> <p>【学習の内容】 1 子どもの成長過程において、生命現象にリズムが獲得されていくこと。 2 体温、血圧、呼吸、睡眠など各種生理生化学的活動は、地球の自転に伴う昼夜のリズム、気圧・気象・日射・日照等、自然環境からの刺激を受けながら、リズムが修得（獲得）される。 3 乳幼児期は、これら人間の生命にとって重要な生理的意義を有する生体リズムを獲得し、生きる力の基盤が形成される。</p> <p>【キーワード】 成長過程、生体リズム、同調・脱同調、光環境、高照度光療法</p> <p>【学習の課題】 生体リズムを獲得（同調）していく過程にある乳幼児期と獲得された生体リズムが脱同調過程にある老年期で、どのような生理的特性または諸症状を伴うか生体リズムの脱同調の例としての時差ぼけや認知症と生体リズムの脱同調の関連、その症状改善に高照度光療法を用いることなどにより、早朝の朝日を浴びる健康生活習慣と自然環境刺激の必要性について、論証せよ。</p> <p>【参考文献】 「照明学会誌」「日本生物気象学会誌」「International Society of Biometeorology」「建築衛生学雑誌」等の論文 日本気象学会編『生気象学の事典』朝倉書店、1992 千葉喜彦・高橋清久編『時間生物学ハンドブック』朝倉書店、1999 川村浩著『脳とリズム（シリーズ脳の科学）』朝倉書店、1989</p> <p>【学習する上での留意点】 この領域は、子どものアレルギーや低体温、疲れやすさなど、各種不定愁訴、不適応行動に至るまで、心身の不調和の肢体的背景として、注目されるものである。心身状態の不調和は、生物学的発達課題、ここでは人間の生きる力の根底を支える内部環境の調整（工場制の維持）能力を獲得してゆく過程で現れる諸現象として根源的に理解しておく必要がある。夫々の専門領域に入り込んでの学習は時間を要するものであるが、子ども理解の第1歩として、子殿の成長を支える保育環境のあり方を考える重要な役割を演じることに留意したい。</p>
3 . テ ー マ	人間の成長過程と環境刺激 (III) 免疫系・内分泌系の発達と環境刺激
	<p>【学習の目標】 脳神経系の発達に伴って、免疫系・内分泌系が、相互に関連しながら、発達することを理解する。脳神経系⇔内分泌系⇔免疫系の連携した発達によって、内部環境（個体）の恒常性（健康の幅・適応の幅）が、維持増進される。外的環境からの刺激を受けた人間の感性、とくに快適感覚（情緒情動の安定）が、これらの機能の調和的発達を促す。生活環境刺激は、日常の生活習慣の確立と共に連動して発達することを明らかにする。</p> <p>【学習の内容】 1 免疫系・内分泌系・脳神経系の相互作用によって、個体の生命現象が調和調節されていること。 2 寒冷・暑熱環境刺激が、皮膚粘膜を刺激し、温冷感の発動が、体温調節機構の発動にどのような影響があるか、自律神経系をかいした脳神経系への発達刺激として受け止められると共に、脳下垂体→副腎系（内分泌系）への発達刺激、さらに免疫系への関与について学ぶ 3 乳幼児期、学齢期、思春期における脳神経系、免疫系、内分泌系の発達課題について明らかにする。</p> <p>【キーワード】 免疫機能の発達、内分泌機能の発達、成長ホルモンの分泌、身体発育、冷刺激の皮膚感覚発動、免疫物質の産生亢進</p> <p>【学習の課題】 脳神経系⇔内分泌系⇔免疫系は、外的環境刺激を受けた内部環境の調節反応系として、相互作用しながら、発達してゆく成長過程として現れる生命現象であること。</p> <p>【参考文献】 伊藤真次著『脳のホルモン：前頭葉をめぐって』朝倉書店、1993 馬場一雄著『成長の生理学』『成長の生化学』医学書院、1966</p> <p>【学習する上での留意点】 内分泌⇔脳神経系⇔免疫系のトライアングル（相互作用）は、現代の児童学・教育学では、当然の基本原則となっているが、そのメカニズムをしっかりと把握するまでの実践現場への展開は未だ不十分な状態にある。とくに内部環境の恒常性を如何に保つか、その能力を培うための外部環境刺激をトータルに理解していくことが重要である。</p>
4 . テ ー マ	人間の成長過程と環境刺激 (IV) 成長過程における睡眠の役割
	<p>【学習の目標】 小児の睡眠機能の発達の様相と脳神経系の発達を理解し、睡眠の身体調節機能の役割を理解する。</p> <p>【学習の内容】 睡眠のパターンと成長ホルモンの分泌 加齢による睡眠機能の発達 睡眠（夜）と活動（昼）時の生体機能のリズムの獲得 お昼寝の役割（風俗習慣含む）</p>

	<p>【キーワード】睡眠と覚醒、睡眠の深さとパターン、乳幼児の睡眠の特性と生理的意義</p> <p>【学習の課題】ヒト胎児では、REM/NREM 睡眠のリズム機能が開始され、妊娠 37 週ごろには成熟することが明らかになっている。ヒト胎児行動から、中枢神経機能の基盤、とくに制御中枢としての延髄、橋、橋皮質投射路の機能の成熟過程も含めて、人間の成長過程における睡眠の役割を理解する。お昼寝の生理的意義、早寝早起き、生体リズムの形成基盤としての睡眠、披露と睡眠、快適睡眠の確保のための睡眠環境科学の理論を学び、実践化、健康生活習慣化を図る。</p> <p>【参考文献】鳥居鎮夫編『睡眠環境学』朝倉書店、1999 前記、ベビーサイエンスからの文献</p> <p>【学習する上での留意点】睡眠の科学の深さと広さ、実践応用、人間の情緒情動、日々の健康生活上の重要基盤としての、生きることの基本条件としての睡眠の科学的把握を行うこと。</p>
<p>5 . テ ー マ</p>	<p>人間の成長過程と環境刺激（V）体温調節能力の発達と環境</p> <p>【学習の目標】担当教授 鈴木路子の博士論文の中心実験は、小児の体温調節能力の発達を見るためのものであった。ここでは、皮膚表面温度、呼気分析（ガス分析）等、古典的になっている生理学的手法によって、明らかにした。このような手法によって、明らかになった小児の体温調節能力の発達は、現代社会における発達のゆがみも含めて、小児の成長過程で重要な生理的意義を持つこと。このことは発達を阻害する各種要因として、都市化・人工化された閉鎖的温度環境が上げられる。とくに現代の高気密化した建築様式が、児童の免疫機構の発達阻害を促し、アレルギー疾患の増大を予測した。ここでは、担当者の研究及び教育の原点を体系化して提示したい。</p> <p>【学習の内容】1 体温調節機能の発達の指標、方法論の検討⇔実験的方法の検討、フィールド研究への応用 2 児童学研究の生理学の基礎として、寒冷暑熱反応としての体温調節機能の発達 3 体温調節中枢と情緒・情動の中枢である間脳・視床下部にあること、薬理学的的方法論により、体温調節のメカニズムにふれ、小児期の発達過程における成人期への移行期としての 10 歳前後の特性について考える。 4 体温調節の発達及び体温の生体リズムの年齢差、個体差、体質差について考察し、喘息児・自閉症児・不登校児の一般健康児との対比を文献学的に行う⇔可能ならば、実測を行い、確認する。 5 ここから得られた結果は、人間のよりよく生きることが、身体の生理的基盤と心理的(情緒・情動的)基盤の調和的発達につながることを示唆するものであり、児童学研究の切り口を提示するものであることへの気づきを学ぶ。</p> <p>【キーワード】物理的調節・化学的調節、皮膚温、代謝活性、体温調節中枢、情緒情動の中枢</p> <p>【学習の課題】体温の生理的意義、研濃い指標としての意義について、実証せよ。</p> <p>【参考文献】中山昭雄編『温熱生理学』理工学社、1974 ウインスロー（北博正訳）『温度と人間』医歯薬出版、1966 緒方維弘『適応—気候風土に対する適応（健康の生理学9）』医歯訳出版、1973 JAMES D.HARDY, A.PHARO GAGGE, JAN A.STOLWIJK, PHYSIOLOGICAL AND BEHAVIORAL TEMPERATURE REGULATION, CHARLES C THOMAS/PUBLISHER, 1970</p> <p>【学習する上での留意点】ここでは、生理学的指標を用いて、子ども理解を深めること、その研究方法論について学ぶ。児童学とは、よりよい児童の成長過程を明らかにし、児童の人権（生命権）、発育発達権、学習権を支援する学問領域であること、その成果は、児童の生活環境、育児環境に生かされ、制度化されて初めて、児童学の研究成果となることを確認するための学習であることに留意すること。</p>
<p>6 . テ ー マ</p>	<p>人間の成長過程と環境刺激（VI）形態発育・機能発達の生育環境差—耐寒性・耐暑性の発達の生態学—</p> <p>【学習の目標】熱帯地域、寒冷地域、温帯地域など気候風土によって、人間の成長過程における環境適応能の発達は異なる。このことは、毎日の生活環境から受ける温熱刺激によって、生理的適応能の発達が異なること、とくに暑さ・寒さの温度ストレスが、耐暑性・耐寒性に与える影響を明らかにする。自然環境刺激—反応系として、成長過程を明らかにし、例えば、能動汗腺の発達には臨界期のあること等、発達には至適時期のあることを学ぶ。</p> <p>【学習の内容】1 気象条件とヒトの適応、とくに成長過程で獲得される耐寒性・耐暑性の児童教育学的意義を考える。 2 インドネシア小児（4・5 歳～14・5 歳）の耐暑性テスト、耐寒性テストの現地調査結果を吟味する。 3 インドネシア在住日本人小児の結果と対比する。 4 これからの児童を取り巻く環境を生理的適応能の発達の視点から考察する。</p> <p>【キーワード】耐暑性、耐寒性、発達の臨界期、自然環境、気象因子、生活習慣、生理的適応能、行動的適応能</p> <p>【学習の課題】教科書に示されたインドネシア小児の発汗機能から、生理的適応能の発達と行動的適応能の発達について考察せよ。</p> <p>【参考文献】鈴木路子・木村康一編著『保健・衛生ノート—保健科教育にいかす諸科学』（第 11 章 人類生態学の立場から pp371-399）1986 鈴木路子編『人間環境・教育福祉論』第 1 章 子ども達の未来 pp1-13、2007</p> <p>【学習する上での留意点】生理的適応能の発達に必要不可欠な自然環境刺激が、欠如した都市化、人工環境化が、児童の耐暑性耐寒性にどのような影響が、及ぼされるか、また現代社会における児童の不定愁訴、アレルギー、各種不適応現象との関連がどのように見出されるかに留意する。</p>
<p>7 . テ ー マ</p>	<p>児童の発達と体質傾向—体質傾向の年齢的消長—</p> <p>【学習の目標】体質傾向とは、与えられた環境刺激に対する生体側の現す諸症状にどのような傾向があるかについてその特徴を明らかにする概念である。一般に医学（小児医学）の領域では、同じ環境刺激であっても、年齢によって現れる症状とその臓器が異なることが観察されている。遠城寺は、乳児期の侵襲性体質（皮膚粘膜への反応傾向）、学齢期の胸腺リンパ体質、思春期の神経関節炎体質を提唱した。このような体質傾向と疾病罹患（現す諸症状）傾向には、一定の関連性が存在することを明らかにし、児童理解の一助とする。</p> <p>【学習の内容】1 疾病罹患傾向、体質傾向には年齢的消長のあることを遠城寺宗徳と馬場一雄の臨床場面からの法則について、その生理的病理的免疫学的意義について学習する。 2 このような傾向の背景にある生理学的成長過程を明らかにする 3 発達過程における年齢的消長をかく乱させる諸因子として、社会文化的環境因子が上げられるが、そのことがなぜ出現するかについて考察する。</p> <p>【キーワード】体質傾向、年齢的消長、アレルギー反応、臓器別発育パターン（スキヤモン）、疾病罹患傾向</p> <p>【学習の課題】体質傾向の年齢的消長及びアレルギーマーチの概念について説明し、その生理学的意義について検討せよ。</p>

	<p>【参考文献】 馬場一雄『成長の生理学』医学書局 遠城寺『小児の体質傾向の年齢的消長』（宮尾定信編『臨床体質学』金原出版、pp28-30、1971） 教科書、鈴木路子編『人間環境・教育福祉論』pp176-178、2007</p> <p>【学習する上での留意点】 体質傾向の概念は、1970年代に提唱されたものである。しかし現代の小児医学の臨床場面においても、アレルギーマーチの概念として、馬場一雄らによって提唱され、小児の成長過程で現れる一過性の諸症状として理解され、その症状が定着または固有化されることのないように、適切な保育環境刺激の必要性が指摘された。しかし、現代の保育環境の急激な変異は、この傾向の一般的傾向として認識することが困難な状態にまで至っている。ここでは温故知新としての学びの再現をされたい。</p>
8 . テーマ	<p>児童の成長過程と疾病罹患状況—有症率の地域差・生活環境差—</p>
	<p>【学習の目標】 児童の疾病罹患傾向（有症率）には、地域差、生活環境差が重要な要因であった。近年、特定地域の環境汚染の時代から、広域的影響によることが多く、さらに住環境とそこに住む人間側の生活習慣による差が大きい時代となった。例えば、家族に喫煙者のいる場合、高気密な建築様式での喫煙による室内空気汚染は、交通量の多い交差点での大気汚染濃度の30倍以上というデータが存在すること。このことは地域環境汚染以上に人間側の生活習慣（行動）による空気汚染が、人体に影響を与えていることが示唆されている。人間—環境系は、人間の生活による環境の変化（環境形成作用）の重大さを、地球温暖化、異常気象も含めて理解すると共に、成長過程にある児童の健康影響は、成人まで長期的な影響を受けていることを科学的に認識することを学習の目標とする。</p> <p>【学習の内容】 1 ゼイ鳴率の地域差の年次の推移（文献）より、大気汚染地域における児童の呼吸器系疾患・呼吸機能の発達。 2 高気密住宅における室内空気質、及び子どもの尿中ニコチン用物質の排泄と家庭内喫煙者の有無による優位な相関を示す調査結果（子どもの受動喫煙による生体影響）より、具体的環境影響評価を学習する。 3 地域環境における各種症状の疫学データから学ぶ。 4 地域の環境差を、空気、水、気象、民度、福祉施策等、社会文化的環境要因も加味した小児の疾病罹患傾向の疫学調査を企画し、実践、分析評価、改善試案を作成する。</p> <p>【キーワード】 地域差、有症率、疫学調査、児童、成長過程、環境改善策、都市計画、福祉・医療施策</p> <p>【学習の課題】 地域における児童の疾病罹患傾向を、検診結果を用いて分析し、地域差、生活様式差（生活習慣差）を明らかにし、今後の環境施策を提案する。</p> <p>【参考文献】 各種地域環境に関するデータベースの検索</p> <p>【学習する上での留意点】 有症率の年齢的推移が近年見られなくなったこと、また一般的な地域差ではその違いが見られなくなったことは、どのような意味を持つかに留意したきめ細かな問題への切込みが必要である。</p>
9 . テーマ	<p>大気汚染と児童期の諸症状</p>
	<p>【学習の目標】 大気汚染地域の児童の呼吸器系疾患、呼吸機能の発達への影響は、昭和40年～50年代の宇留野、吉田らの調査結果からは重要な意味を有していた。近年、どの地域でも都市化が進み、自動車排気ガスの影響は、日本国、津々浦々まで行き渡っている。道路沿いの学校、住宅は、地方でも変化がなくなった。さらに建築様式の気密化や新築、改築による揮発性化学物質の影響は、児童の気道粘膜への影響を及ぼし、児童生徒のアレルギー疾患の罹患率は、10年で10倍と増加の一途をたどっていることを、社会環境の変化が及ぼす児童の心身状態への影響として、トータルに概観し、今後の環境保全施策と生活習慣の基本的問題提起の重要性を提示することが、学習の目標である。</p> <p>【学習の内容】 昭和40年代より、現代に至る大気汚染による児童の健康被害がどのように変遷し、現代の環境と児童の健康課題は何か？大気汚染から、室内空気質による乳幼児、学齢児の健康被害に注目する。乳幼児期からの呼吸器粘膜・免疫・自律神経系等、生体の内部調節機能の発達段階での受動喫煙や室内空気質の影響の重要性、環境科学的には、大気汚染の地球規模での問題・二酸化炭素上昇の現状と温暖化、オゾンホールと有害紫外線の上昇など、次世代を担う児童の生活生存に関わる地球環境レベルでの緊急課題であることを認識する。21世紀の児童健全育成は、環境課題への長期的展望を持った対応の科学的重要性を認識し、地域レベルでの行動化を図ることから出発する。</p> <p>【キーワード】 大気汚染物質、一酸化窒素（NO）、総揮発性化学物質、呼吸器系疾患、呼気中一酸化炭素濃度</p> <p>【学習の課題】 昭和40年代以降の大気汚染の現状と児童の健康影響について考察し、児童を取り巻く環境と疾患との関連を明らかにする。住環境下での健康被害として、接着剤・塗料、その他、新建材の導入によって、室内空気質の問題がクローズアップされている。いわゆるシックハウス症候群である。成長期の児童の気道粘膜での一酸化窒素の発生等との関連も含め、幼弱細胞への影響についても十分な配慮が必要であることを検討せよ。</p> <p>【参考文献】 児童環境衛生研究会編『児童の環境衛生』家政教育社、1974 鈴木路子編『人間環境学』福村出版、1997 鈴木路子編『人間環境・教育福祉論』光生館、2007</p> <p>【学習する上での留意点】 人間の生活生存、生産・消費活動の中で、環境の変容は著しいことを科学的に認識し、これからの児童の健全育成に環境問題は直結していることを十分に認識したい。</p>
10 . テーマ	<p>音環境と児童の健康</p>
	<p>【学習の目標】 航空機騒音環境地域における乳幼児の睡眠障害や聴力損傷、学校における地域騒音と児童の聴力損傷、防音校舎内児童の学習能率、心身状態への影響や学校騒音対策を含めて、騒音の児童に与える影響を実験調査結果から学ぶ。定期健康診断には、聴力検査が含まれ、また、学校環境衛生の基準における「騒音及び騒音環境」の基準、騒音の測定法等の実践も学習する。防音、吸音、遮音など、騒音対策も学ぶ。</p> <p>【学習の内容】 小児期の音環境への反応は、聴覚の発達過程として、どのような意義があるか？聴覚の発達は、すでに胎児期から開始され、出生後であっても、そのリズム、音の質によって、情緒情動の安定に結びつく。一般に波の音、川のせせらぎ、秋の夜長の鈴虫、こおろぎ、これら音響環境としての視点から、児童の脳神経系の発達との相互作用でとらえることを第1のステップとする。第2のステップは、音量の問題である。常に高い音圧に暴露される児童の聴覚損傷は、無自覚のうちに進行する。航空機の爆音にさらされて育つ乳児などはその例である。航空機騒音、交通騒音、振動を伴う工事音など、人体への影響は、感覚器のレベルから、内分泌・免疫系へのバランスを崩す。このような有害なレベルから、児童を守るための各種環境基準とその測定、騒音対策等を検討する。</p> <p>【キーワード】 騒音、楽音、聴力損傷、児童、聴覚の発達</p> <p>【学習の課題】 児童の情緒情動の安定と聴力損傷という2側面からみた音環境の健康影響とその対策について。</p>

	<p>【参考文献】 児童環境衛生研究会『児童の環境衛生』家政教育社、1974 鈴木路子、真野喜洋編『教育健康学』ぎょうせい、2007</p> <p>【学習する上での留意点】 一般に児童の健康安全の立場から、音環境を扱うとき、騒音及び騒音レベルとして、学校環境衛生基準が設定されている。等価騒音レベルとして、55 デシベル以下とされる。さて、この基準はどのようにして設定されたか？胎児期から、乳幼児期にかけての聴覚の発達はどのような過程で生まれ、適応した音の質はリズムも含めてどのような特性があるか等、種々の視点から検討されたい。児童福祉施設、学校等、児童を取り巻く住環境に、騒音や音響をどのように取り込むか今後の課題は大きい。</p>
11. テーマ	生態系における人間の発育、生命・生活生存の未来予測—人類の存続と環境保全—
	<p>【学習の目標】 地球温暖化による異常気象、地球存続の危機の中で、人類の存続が危ぶまれている今日、人間の発育、生命、生活生存に多くの影響が表れている。児童環境保健論は、児童の健やかな成長を次世代育成という視点から論じてきたが、地球レベルでの環境保全が、きわめて重要な決め手となった。少子高齢化社会の問題も含め、児童の社会問題にまで至っている疾病罹患・各種症状・情緒情動レベルでの異常行動の問題は、対極的に人間の自然の法則を越えた環境破壊であり、エネルギー枯渇への人類の消費活動の増大と関連していることは否定できない事実である。これからの地球の未来、人類の未来、子どもの未来、成長過程への環境作用をトータルに考える必要がある。自然科学、社会科学、人文科学の方法論を縦横に駆使し、「人間福祉・人間環境」という人間の生命現象の尊厳は、自然環境との一体感の中で営まれる必要がある。環境保全を前提にした「環境保全工学」の技術導入、人間の生き方、自然環境との対比で人間を考えるのではなく、環境＝人間として、専門分化された近代科学のもたらしたこの実態を把握し、今後は人類のよりよい存続と地球環境の存続を一体化した臨床人間環境教育のあり方を考察する。</p> <p>【学習の内容】 1 人間の本来獲得される免疫の発達、自律神経系の発達、脳神経系の生物学的発達に多くのゆがみが現れている科学的事実を検証するとともに、人類の未来を考慮したとき児童環境保健論を基盤とした研究成果をどう生かしていくかを考察する。 2 近代科学のもたらした功罪を今一度検討し直してみる。 3 日々の健康生活の中で、児童の未来を育むための我々の残された仕事とは何かを十分に検討し、具体的な実践への結びつきを企画立案、そして、最終的な制度化に導くための手だてを考え、実践化してゆく。</p> <p>【キーワード】 人類、生態系、発育、生命現象、人類の存続、環境保全</p> <p>【学習の課題】 自然環境の中で生きる力を遺伝子のレベル（進化の過程）で培ってきた人間の恒常性とその維持に気づくことなく、環境側を改変し続けた結果としての地球環境の危機と成長過程のゆがみをいち早く気づかせるための臨床教育の展開を思索する。</p> <p>【参考文献】 各種政府刊行物（環境白書ほか）</p> <p>【学習する上での留意点】 従来人間にとっての環境を縦横に調節するのではなく、人類は自然環境の一部であることをまず認識すること。</p>
12. テーマ	児童の成長と社会文化的環境（I）人類生態学的調査結果：インドネシアの子ども
	<p>【学習の目標】 インドネシア共和国、西ジャワ、スンダ民族の子どもたちの日々の生活、疾病罹患、学校生活、発育、各種身体機能としての環境適応能力の発達調査を実施した（学術振興会特定国派遣研究員としての5ヶ月間の現地調査結果）。ここから得られたデータを用いて、インドネシア児童の人類生態学的調査過程を循環型社会への還元とともに、人間の心の有り様を意識のレベルでのインドネシア小児の生活の流れの中で学び、先進諸国の合理性と地球環境規模での環境変化への警鐘として用いる。</p> <p>【学習の内容】 6の人間の成長過程と環境刺激（VI）形態発育・機能発達の生育環境差—耐寒性・耐暑性の発達の生態学—でのテーマとフィールドは、共通する。6では、生理学的・形態学的適応能力の発達を考察した。ここではとくに、社会文化的環境を心のレベルで生活の営みにとけ込ませているインドネシア小児の生態を観察し、社会文化適応能力の発達に視点を当てたフィールドでの観察と考察を行う。近代社会の中で、合理化・組織化された日本の学校教育の場で出現している諸現象への問題解決の糸口を、インドネシア児童の実態（生態）から見だし、大自然に調和した思想と生活習慣が我々に何らかの気づきを与えるきっかけになることが期待される。</p> <p>【キーワード】 祈りの前のマンデイ（水浴）、夜明けの祈り（一日5回の祈り）→生活リズム（生体リズム）の形成、家族、スンダ民族、宗教教育、行動的適応</p> <p>【学習の課題】 日本人の児童生徒の生活時間（生活リズム）とインドネシア児童のそれを比較し、自覚症状及び体温のレベルでの現れ方を分析し、児童の自然環境への調和の導入を試みる。</p> <p>【参考文献】 鈴木路子・木村康一編著『保健・衛生ノート—保健科教育にいかす諸科学』（第11章 人類生態学の立場から pp371-399）1986 鈴木路子編『人間環境・教育福祉論』第1章 子ども達の未来 pp1-13、2007</p> <p>【学習する上での留意点】 この現地調査は、鈴木らが、5ヶ月間インドネシア西ジャワのバンドンを中心に、高度の異なる4地域に滞在、生活をともにする中で得られたデータである。子どもたちの生態を学校落居期の両側面から、主としてイスラム教との宗教生活二期版をおいた日々を追ったものである。インドネシア共和国としての学校システムではあるが、この地域は通常の会話は、すべて現地語のスンダ語である。アンケート調査もバンドン教育大学日本語学科長 アテイン先生によって、スンダ語に翻訳し、読み上げスンダ語での説明の上で記述させたものである。</p>
13. テーマ	児童の成長と社会文化的環境（II）人類生態学的調査結果：ブラジルの子ども
	<p>【学習の目標】 移民の国ブラジルにおいて、各種民族の生態と日系人移住地域での子どもの発育や生活の様相を、アマゾンの加工の町ベレンより、車で5時間、トメアスー開拓地での子弟の調査結果から学ぶ。トメアスーから、都市ベレンに移り住んだ子弟の発育パターンは、日本の児童生徒のそれに類似し、思春期のスパートが早期化する。人間の成長は、社会文化的環境刺激によって、発育の早期化現象と肥満児の出現が認められ、自然環境で獲得された適応能力の発達異常の影響を社会文化的環境の変化が及ぼしていることが明らかになった事実について学習し、児童を取り巻く社会文化的影響にどのような対策を講じるかについて検討する。</p> <p>【学習の内容】 ブラジリアマゾン地域を含めた人類生態学的調査（鈴木路子文部省在外研究員（10ヶ月滞在））の方法論とその結果を紹介する。</p>

	<p>→人間の成長・健康・疾病罹患と環境とは直結していることを再認識する。 →日系移民の移住地での生活様式、日系人組織、学校教育、ブラジル人（欧州よりの移民）</p> <p>【キーワード】 ブラジル日系移民、人類生態学的調査研究、発育の早期化・促進化、ブラジルの教育事情、気象</p> <p>【学習の課題】 日系移民子弟の発育の様相から、学び-発育の社会文化的環境の影響に歯点を当てて、これからの我が国の児童健全育成にどのようにいかしていくか検討せよ。</p> <p>【参考文献】 鈴木路子ほか2名『熱帯雨林アマゾン地域の小児の発育と環境に関する現地調査』移住研究 第27巻、pp 1-15、1991 西沢利栄・小池洋一著『アマゾン生態と開発』岩波新書、1992 東郷正美『身体計測による発育学』東京大学出版会、1998 小林正子ほか『小学生の肥満は夏はじまる』民族衛生、61巻、6号、309-316、1995 小林正子『いじめや家庭問題が体重に与える影響』文部省科学研究費補助金報告書（代表 東郷正美）、1994</p> <p>【学習する上での留意点】 身体発育値の教育健康学的意義に留意すること。</p>
14. テーマ	人間環境・福祉教育学的視点とは？—福祉・保健・医療・教育の融合—
	<p>【学習の目標】 児童の成長過程での環境からの長期的影響は、生体リズムの形成をはじめとして、脳神経系⇄内分泌系⇄免疫系のトライアングルを循環しながら生命現象を営む。この様相は、福祉・保健・医療・教育を融合して、児童のよりよい発育発達、生活生存を守ることに連動する。本授業は、自然科学的アプローチを介入させた人類生態学的調査、すなわちフィールドでの生活観察をベースにしたものである。福祉も、医療も、保健も、教育・保育もすべて網羅される。このトータルにみた児童の実態から得られた知見を討論し、人間環境と教育福祉の融合を図ってゆくことを学習の目標とする。</p> <p>【学習の内容】 人間環境とは？人間は、自然環境の一部を構成し、一体であるという認識に立つとき、環境汚染、環境破壊は、人体破壊・人間破壊につながる。内部環境の恒常性を維持することは、環境刺激の激変を受けても内部調整し、環境を内在化できうる能力を育成することが教育につながる。医療や保健、福祉は、人間社会における組織に基づいた分野であり、それぞれの共通基盤は人間環境のよりよい存続そのものであることを1から13テーマで扱った内容からまとめ上げる。</p> <p>【キーワード】 福祉、教育、人間福祉、教育福祉、人間の存在と尊厳</p> <p>【学習の課題】 地域福祉、地域医療、地域保健の領域の共通対象は人間、そして人間形成過程にある児童期の子どものよりよい生命現象の維持である。現実の子どもの様相を観察し、その実態把握結果を人間環境・教育福祉の立場から分析考察せよ。</p> <p>【参考文献】 教科書『人間環境・教育福祉論』光生館、2007 各自の専門領域の教科書等</p> <p>【学習する上での留意点】 この授業を受講する院生は、それぞれの専門体験を有しているので、本授業で提示された具体的データやその背景となる科学も含めて、どれも共通性と相互理解、共存によって、よりよい目的に到達することを究極のねらいとしていることに留意する。</p>
15. テーマ	教育の原点は、人間の生命のよりよい存続である—教育健康学の視点—
	<p>【学習の目標】 福祉、教育、保健、環境、人間の成長過程におけるこれらの領域は、常に相互関連の基に連携し合いながら、次世代を育む児童を支援していくことの重要性を学ぶ。ここに学問的縦割り近代科学の限界性と有効性、臨床の知の科学的根拠、臨床的体験の研究的意義をそれぞれの体験や文献学的知見から討論し、新たな児童学のパラダイムを構築する。</p> <p>【学習の内容】 教科書「人間環境・教育福祉論」の学問的背景を検討する。福祉を制度的側面から考えたとき、人間不在の福祉制度・組織として存在し、人間を直視した人間の存在・育成・可能性を究極の目的にした人間福祉の考え方を教科書第4章より学ぶ。環境保健、環境衛生学とは、人間の現実の生活そのものを直視し、未来の生態系としてみた地球環境と人類の生存の可能性に行き着くものであることを確認する。人間の生活や生命現象への意識の変容の重大性を認識する。一般住民への、また児童の保護者への広義の健康教育試案を作成する⇄ヒトの心を揺さぶる児童環境保健論の展開を図る。</p> <p>【キーワード】 人間福祉・共鳴・共存・環境・人間生態系・子育て支援・少子高齢化・社会制度・教育制度</p> <p>【学習の課題】 教育の原点は何か？またその教育を支援するための児童学研究の有効性と限界性について考察せよ。</p> <p>【参考文献】 教科書『人間環境・教育福祉論』光生館、2007</p> <p>【学習する上での留意点】 現在おかれているこの院生の立場、職業によって、児童環境保健論のとらえ方は異なることが予測される。しかし、人間の受精卵が発生過程において、生命が存続できるように遺伝子のレベルで用意された適応能の生理的生化学的レベルでの各種機能を十分に育むことが、児童学の根底にあり、教育とはまさに生きるための基盤となる各種機能の発達を支えることを今一度確認し、修士課程における各院生の研究意義を感じ取ってほしい。</p>